

## 「思想の生理」または哲学の根源を問い続ける場として・・・

### 最首悟さんの<いのち>の詩学と問学についてのノート

2022/6/23 石橋浩治

哲学塾東京分校（の・ようなもの）世話人

#### \*200回目を迎えた最首塾定例会

最首塾定例会は、1994年から約28年、現在では、毎月1回のペースで開催され、2022年3月に200回目を迎えました。これはたいへんすごいことです。なによりも、歴代の世話人の方々のご努力の賜物であり、最首さんの穏やかな、優しいお人柄によるところが大きいと思いますが、最首さんのお話が、最首さん自身の生き方と通じるものであり、みずからの存在において語るべきことを語っているからだと思います。これからも、最首塾がいつまでも続きますように・・・と願っています。

わたしが初めて最首塾定例会に参加したのは、2009年10月（第78回）、激しい雨が降り続く中、東大駒場を訪ねたときです。それ以来、わたしにとって最首塾は、いつも感性に刺激を受け、思考を触発される場であり、新たな出会いの場としてあります。毎月（毎月）とはいきませんが、これからも最首塾に参加させていただきながら、問いを問い続ける場として、さまざまな想いをめぐらしていきたいと思います。めぐらすことは、囲みつつ、開くこと、そして、開いては、また囲む・・・という思考の往還です。

#### \*高校全共闘体験と「最首悟」の思想との不意の出会い

わたしは、69年代後半～70年代初頭にかけて高校全共闘運動を経験し、その敗北一解体、その後の蹉跎と漂流のなかで、必死でなにかを探し求め、「情況」誌上などで「最首悟」の名を目にし、「最首悟」が書いたものを読んでみようとしたことはありましたが、当時、20歳前後のわたしには、何を問題にしているのか、何を言おうとしているのか、よくわからなかった、例えば「最近、自分のダウン症の子供の問題、障害者の問題それとだぶって水俣の問題などに取り組んでいて、文章なども書いています。その子供をどう育てるのかというほとんど半分以上を占めています。（中略）…そういう子供をもって考えていることは、意外と68年段階から続いているということです。」（『流動』1981年11月号「徹底討議：今、全共闘をふりかえる」より）などの発言は、当時のわたしにとっては意味不明、わからない、「・・・ん？」でしかありませんでした。

最首塾への参加と、最首さんの書かれたものや対談などをあらためて読んだりするようになったきっかけ、不意の出会いは、いくつかの伏線（＝複線）がありますが、「図書新聞」のシリーズ「60年代・70年代を検証する」（聞き手・小嵐九八郎）の第六回「最首悟（元東大全共闘助手共闘）に聞く『全共闘は権威を見事に打ち壊した』」（2008年11月22日号に掲載）を読んだことが大きかったように思います。東大全共闘は全共闘運動の原

点のひとつであり、わたし自身が「全共闘の解体以後と「自己否定」の論理」という思想的課題をどこかで引きずっていることから手にしたのだと思います。インタビュー形式での語りという読みやすさもありました。「さっぱりわからん！」かった「最首悟」がわかったような気がしたのです。まさに、「霧が光る」ように最首さんが現れたのでした。どんなところが、わたしの胸にストンと落ちてきたのでしょうか、「最首悟（元東大全共闘助手共闘）に聞く『全共闘は権威を見事に打ち壊した』」より、最首さんの発言を引用してみましよう。

「……………これは結局、キリスト教の問題だと、その後筋道がついたと思う。キリスト教における個人の問題からプロテスタンティズムが出てきて、労働を定義していく。そしてヘーゲルに至って、現在を否定できることこそが人間、そこからの前進こそが人間ということになる。そうすると、キリスト教に向き合うことなしに、人間、階級は分からないということ、そして私には芯（信）がないんです。

70年に吉本隆明から、最首というチャラチャラした助手は思想も実践もわかつちやいないのだとご託宣を受けて呻きながら、やっとありがたいご託宣だったのだと思うようになったこと、そして私が先生と決めた西村秀夫先生（矢内原忠雄の門下）から、最首君はクリスチャンに決まっていると言われたこと、この二つも実に大きくて、それが「問学」になっています。学問をひっくりかえして、学の意味を問う営みで、学問は普遍とか真理という軸を立てないことには成立しない、そして普遍と真理をカッコに入れる関係主義や相対主義で何をしようとするのか、が問題です。」

「人間というのは人と人の居る間でしょう。星子と暮らしていて、人間という場のあり方ということが浮かび出てくるということを思いますね。

最近というか、90年代の終わり頃から、垂れ込めている霧が光っている、霧それ自身の一粒一粒が発光しているような、乳白色の霧みたいな中に、居るような気持ちになってきたようです。希望でも絶望でもないんですが、どっちかと言うと希望。つまり、どこに行くということもなく、どこに向かっているということもわからない、けれども安心できるということなんです。星子と暮らしていて、現在のことも将来のこともどうなるかと心配し始めたら、切り（霧）がないんです。そういうことがなくなってきたような、キリがある感じがしますね。重度複合障害の人と共に生きるということの安心感ということ、そういう場に「居る」ということの慰藉。霧というのは普通は「五里霧中」とか不安の象徴なんです、その対極ということでもないんですが、何か霧が光っているんです。不安もひっそりめ、どうしようもなく「居る」ということです。それは生きていく上で欠かせない感覚なのだと思います。

星子は何も言いませんけれども、暮らす力というか、人に考えさせる力をもっているんです。世話をすることが世話されることそのものであるというようなことを考えさせる。

星子を世話しているつもりなんです、世話されちゃっているんですよ。」 などなど

引用した件を読んで「なにがわかったのですか？」と聞かれても上手く説明できそうもありません。高校全共闘として「かるがるしい、いわば、おっちょこちょいの軽挙妄動」（最首悟「孤立有援ともいうべき事態」より）の行動と思考の根底に潜んでいる、そして、その行動と思考を促す働きをしているけれども、それ自体は思考不能な、表現されえないもの＝「思想の生理」を、哲学の根源のようなものを「霧が光る」ように照射してくれたのでした、と言ったらどうでしょう。「詩と思想が交錯する地点から発せられたことば」に出会ったのでしたと、ちょっと格好良く言い直してみたら少しはご理解いただけるでしょうか（伝わらなかったか?!）。高校全共闘という運動の文脈に則して言えば、愚かしくも貴重な日々には焦燥感にかられながら垣間見た、深い絶望と遥かなる希望が表現されているように感得したのでした。人間の根源的な悲哀が基底にはありますが、「じゃあ、自分はどうすればいいんだ？」と思ったとき「目的のない僕ながら、希望は胸に高鳴っていた」（中原中也）のです。

30年余の時間の経過のなかで、わたしの内面に、視角になにがしかの化学変化があり、不意の出会いとして、最首さんの「いのちはいのち」の「いのち論」が視野に入るようになったのでした。

#### \*最首さんの思考のおもしろさと破壊力

「最首さんの思考の基底には、生物学と数学的思考があり、そこに哲学や詩学も接合される、非常に抽象度の高い議論です。それが臨機応変に、縦横無尽に、あちこち飛びながら根源的で、破壊的なエネルギーを秘めて展開されます」（最首塾定例会 100 回記念誌『霧が光る』（2011年12月 最首塾発行）に寄稿した拙稿「霧のなかから、『最首悟』」より）。最首さんの語り、あるいは書かれたものは、論理の部分と詩的イメージが渾然一体となった語りであり、それが一つの文章、あるいはワンセンテンスにあたりるので、そこがわからなさでもあります。しかし、それは論旨が混乱しているとか、論理的一貫性に欠けているのではなく、哲学的、論理的思考から人文的表現へ変わる、変わらざるをえないのです。なぜそうなるのか、最首さんの思考は哲学の基底にあるものを問う、なぜ、もんだいなのか？、問うことを問うものだからです。それ自体をには言及できないが、それなくしては哲学的な思考、問いが発することはなく、論理では語れない「思想の生理」をもんだいにしているからだと思います。

最首さんの語りの世界は、無限大の宇宙にまで拡大することが、その極点において無限小、すなわち思考の零度へと反転するするような「反世界」、全体がひとつの抒情詩のような世界なのです。哲学がおよばぬ場所、そこから発することばは、文学的表現として語られるか、詩的なイメージとして表現され、その優しさ、美しさは、生きてあることを慈しむように解き放ってくれるものなのです。小阪修平さんは「哲学がおよばぬ場所から文

学は発するのです。」と言いましたが、然り、名言だと思います（「大江健三郎とサルトルのこと」『アエラムック 6 哲学がわかる』朝日新聞社 1995 年）。

最首さんの話を傾聴することは、迷路に入り、ときどき息苦しくなるけれども、おもしろく、破壊力を秘めています。最首塾定例会の数時間は妙に人懐かしく、それでいて空想（あるいは妄想）に浸れる、想像と創造の時間、解放感がある、「萌え」のある時間なのです。最首塾の終了後、駅に向かっての帰り道、夕陽のなかの町外れをゆっくり歩いているときは、なんとなく甘美な感覚があります。

### \*あらゆる思考の根底にある「思想の生理」

最首さんの話し、書かれたものの「わからなさ」は、「論理では語れない「思想の生理」または哲学の根源をもんだいにしている」からだと書きました。わたしは「思想の生理」という表現を使う、もんだいにすることがあります。すべての思考、ないし思考する存在が成立する基底にあって、それなしには思考が作動することはありえない<なにか>とでも説明したらいいのでしょうか。だが、やっかいなのは思考それ自体は自らを可能にしてくれる<なにか>を表象化することはできないという背理があります。あえて思考しようとするならば、論理的な世界から果てしなく逸脱し、ありきたりな世界についての思考の枠組みを破壊し、まったく未知な思考の領域を解き放っていくことになるのではないかと思います。

#### （補足 1）小阪修平さんと「思想の生理」

このレポートを書き始めてから、小阪修平さんの論考を再読していると、「思想の生理」について語っている箇所がありました。わたしは小阪修平さんの思考から多くのものを得ていますので、いつの間にかわたしのなかに入り込んでいたのではないかと思います。

「思想の生理」についてのわたしの舌足らずな説明不足、わからなさを補ってもらうために、小阪修平さんが語っているところを紹介します。

「今ここでぼくは、思想の生理とでもいえることをもんだいにしようとしています。生理とは、ここでは思想をとりまくことばにならない暗闇のことを言います。歯の痛みはべつの興奮によって置きかえるしか拒否できないように、思想の生理も拒否できない。無形のうちに思想に影響をおよぼします。あるいは、思想を語っている人間の裏表を決定します。生理とは思想が発していく場所、あるいは突き合わせを迫られる場所でもあります。しかし、思想はこの場所を対象化しないことが多い。それどころか、生理をごまかし、ぎゃくにその人のなかで緊張をかかえてしまうということを、ぼくはよく見てきました。今ぼくがしゃべっていることも、当時のことばではっきりと自覚していたわけではなく、一種の後知恵です。しかし、そこから二つの結論が得られます。一つは、まだはっきりとことばにはならない力が思想の、あるいは思想ということばが大げさだったら、僕たちの態度の背景にあること。もう一つは、思想の生理を自覚することは、自分の思想が個別的なものに、自分でもよくわからない自分のなかに、あるいは自分のなかで自分のことばをとりま

いているものによって根拠づけられていることを知ること、この二つです。・・・」（『現代思想のゆくえ』（彩流社 1994 年）「第 4 章 経験と理念」131-132 頁）

別のところでは、次のようにも語っています。

「・・・（「経験と確信について」は）四つの講演とは異質な文体で書かれているが、それはぼくが自分自身へと向けて書いているからだ。この文章のリズムがおそらくぼくの自分へとむかったときの生理なのである。」（『現代思想のゆくえ』（彩流社 1994 年）「あとがき」238 頁）。

## （補足 2）赤瀬川原平さんの『自分の謎』

赤瀬川原平さんのシリーズ「こどもの哲学 大人の絵本」の一冊『自分の謎』（毎日新聞社 2005 年）の「あとがき」に、「自分が自分のことを考えるというのは、人間の脳が脳のことを考えるのと同じで、最後の一点が見えないはずのものだが、でももじもじしてくるようである。そのもじもじラインを繋いでいくと、不可能な一点が推察できるような気がして、こういうものを書いてみた。」（117 頁）とありました。これも「思想の生理」を語っているものだと思います。

## \* 『二者性』って何？

最近の最首塾では「二者性」をめぐる議論が続いています。「二者性」とは、相互主体とか、協働的存在と言い換えてもよいかと思いますが、相互性＝身体性を強調すべく「二者性」という表現になっているのではないかと思います。「二者性」は二者関係とは違います。二人の個人関係ではなく、二人の自他未分の状態でひとつであり（殻に入った落花生をイメージしてみてください）、最首さんは「わたしたち」ということばで（「わたしとあなた」ではなく、また「あなたにとってのあなたとしてのわたし」でもない）、「曖昧さを曖昧さとしての二者性」という状態として表現しています。共に生きる原理としての「二者性」とは、いのちはいのち、いのちは根底を明言できない、いのちはわからない、「つぎつぎに（プロセス）なりゆく（なる＝二者性）いきほひ（いのち）」。「二者性」が「いのちはいのち」の<いのち論>とどう関連し、深めるものとしてあるのか。

最首さんの論考に「生きやすい者が生きにくい者に身を寄せてより生き易くなってしまいう逆説－ダウン症の星子との<対話>から」（「朝日ジャーナル」臨時増刊号 1984 年 6 月）というのがあります。この論考は『生あるものは皆この海に染まり』（新曜社 1984 年）に「はじめに－星子との<対話>－」として収められています。なんと奇妙な、長い、長～い、でも面白く、なんとなく気になる、そして魅入られてしまうような表題がいいですね。まさに「哲学が及ばぬ場所から文学は発するのです」という表現ではありませんか。「二者性」の原点は、ここにあるのかなと思います。

対談：宗由美子×最首悟「いのちは、わからない。それが腑に落ちると、人は穏やかな優しさに包まれる。」（東本願寺出版「同朋」2018 年 12 月号）から、もう少し詳しく見て行きましょう。

「…私はこの7、8年ぐらいずっと「二者性」ということを考え続けています。つまり、人間は一人という孤独な存在でもあり得るけれども、心の中には自分と他者が一人ずつ居て、いつも応答しあっているような状態もあり、それが共同体の礎になっているのではないか。・・・」(10頁)

「もう一人は他者一般であって、いろいろ変わることもあります。例えば今でしたら、宗さんが私の前に他者として立ち現れますね。けれども、ずっと自分の中に止まっている他者もいて、もちろん私にとってそれは星子という存在になります。キリスト教の世界では、私という人格は神から与えられた絶対的な人格であり、当然一人であることが基本になります。そういう一者性をもとにして関係をつくる場合と、関係そのものの原点として自分の中の二者性をもとにして関係をつくるのでは、自ずと関係のあり方が変わってくるのでしょうか。」(10-11頁)。

それに続いての発言もとても大切だと思いますので、長くなりますが引用します。

「また、私はこのところ、日本語の「人間」という言葉がおかしな使われ方をしていると言っています。もともと中国では「人間」という言葉は「人が住む場所」という意味でした。それが日本では「人の住む世」とか「世間」という意味になり古くから人という意味での使用例は皆無ではないのですが、江戸時代になると人そのものを指す言葉として少しずつ使われるようになります。そして明治時代になった時、英語のパーソンとかヒューマンといった言葉の訳語として「人間」という言葉があてられた。これは致命的な間違いだったのではないかと思うのです。「二者性」ということにつなげて言えば、「人間」というのはもともと「あなた-わたし」という二人が単位ではないか。」(11頁)。

そして、対談の表題にもなっている最首さんの最後のコメントを紹介します。

「(いのちは、わからない。それが)腑に落ちると、なぜか、人は穏やかな優しさに包まれるのです。それはもともと「分けられない」といういのちの根源性に触れているからではないか。そういうことを問うていく営みを私は「問学」と呼んでいるのです。」(13頁)。

最首悟さんの問学と詩学から紡がれた思考の素敵な表現であり、優しさと感動が凝縮されていると思います。

介護の現場で格闘し、思考を紡いでおられる三好春樹さんが「これは、東大全共闘運動を経た日本の知性が、重度心身障がいの星子さんへの介護という体験に出会って達した「新しい知性」の地平ではないでしょうか。」と述べています。これは、東大安田講堂攻防戦から50年の2019年1月、東大安田講堂で開催された「在宅ケアを支える診療所市民全国ネットワーク」主催：シンポジウム『2019 団塊・君たち・未来』での発言です。三好さんの発言の前段部分も併せて紹介しておきましょう。

「五十年前、「情況」という雑誌で、東大全共闘の山本義隆さんと最首悟さんの論文を読んで大きな影響を受けました。

さらに、介護の世界に入ってから、ケアすることの根拠を最首さんに求めてきました。

というのも彼は、星子さんという重度心身障がい者の娘さんを得、四十年以上介護を続けられているからです。（中略）金もうけでも古い倫理観でもなく「内発的義務」というコトバを、さらには最近では「二者性」、つまり単独の自立した個人というのは幻想であり、無数の二者のつながりこそ「人間」=じんかんではないかと語られています。」（「ブリコラージュ」2019年初夏号「介護の世界へと越境せよ」より）。

### \*全共闘・自己否定の論理と「ただの人」・「二者性」

全共闘運動のなかで「自己否定」の論理が語られ、「ただの人間=自覚した人間」という問いが提起されました。「無条件の全体」と言ってもいいでしょう。「ただの人間=自覚した人間」とはなにか？創出される自由な「空間」とは？難しいもんだいです。＜神-人間＞関係という絶対へ帰依する「ただの人間」ではなく、それ自体としての「ただの人間」とは、事実関係の中に置かれた存在であり、最首悟さんは、ゾーンとしての身体の自己生成を「いのちはいのち」の「いのち論」として語ってきました。そして、最近では「二者性」というつながりにある「人-間」という表現でより深められています。

同様なことは、小阪修平さんなら、場と関係性のパースペクティブに自己を見出す「相対のなかの絶対」（事実性としての自分）ということになります。「事実性としての自己」とは「どういうことばでも表現できない自明さ」「ことばというものは「正確なことば」というよりも一種の「像」ではないか」「ことばは自分が世界のなかに他者と関係しながらいるという事実起源もっている」「人間がかんがえること、行動することには、パースペクティブが存在する」「ことば自身が自分の感じとずれてくる。・・・ずれるということにたいして一つの像をなげかけて、またその像をどういふふうに分が経験したか・・・ことばをつかうということは（往還の）プロセスではないか」などなど（『現代思想のゆくえ』（彩流社1994年）第4章「経験と理念」より）。

また、山本義隆さんには『磁力と重力の発見』などの科学史研究のお仕事の他に、『科学史と哲学史を綿密に辿り、跡づけるE・カッシーラーの著作の翻訳という訳業がありますが、現代物理学の量子論や宇宙論が提起する問い、謎と、倫理や政治の主題である人間の自由の問題にどう関わるのだろうか。理系の基礎的な勉強をやり直さないと理解できそうもありませんが、宇宙の始まりや生物学が解明するDNAやタンパク質の神秘的な働きなどにも想いを馳せて、世界をファンタジーとして感じながら読んでみたい、学んでみたいものです。

全共闘が辿り着いた地平（祝祭空間=解放区と「自己否定」論）と「二者性」をかんがえることの意味は？—わたしに与えられた宿題のひとつとして、最首塾に参加するかたわら、この拙いレポートがまさにそうであるような「存在のでたらめな連鎖」とか「雑然が調和を保つ世界」に開き直りながら、さまざまな想いをめぐらし、かんがえていきたいと思えます。

（未 完）